

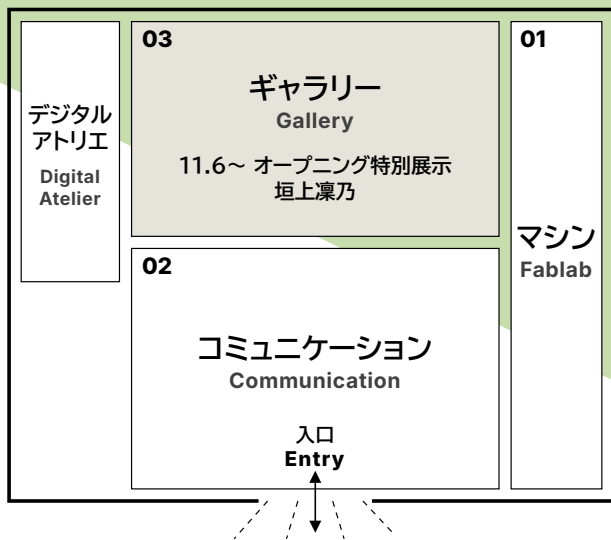


MONO / KOTO 工作室 オープン

2026 11.6 (Fri.)

ものづくり × アート × 新見

デジタルとアナログの両方からものづくりができる「ファブラボ」と、
人が集まって話せるコミュニケーションスペース、
作品を展示できるギャラリーを備えた拠点がオープンします。



01 マシン Fablab

レーザーカッターや3Dプリンター、3Dスキャナーなどを
備え、デジタル加工や試作に取り組めます。

02 コミュニケーション Communication

ワークショップやミーティングなどに使えるスペースです。

03 ギャラリー Gallery

作品や試作品のほか、制作途中の様子も展示できます。

発達支援メディアラボ

Developmental
Support
Media
Lab

発達を支える「メディア」のための「ラボ」。

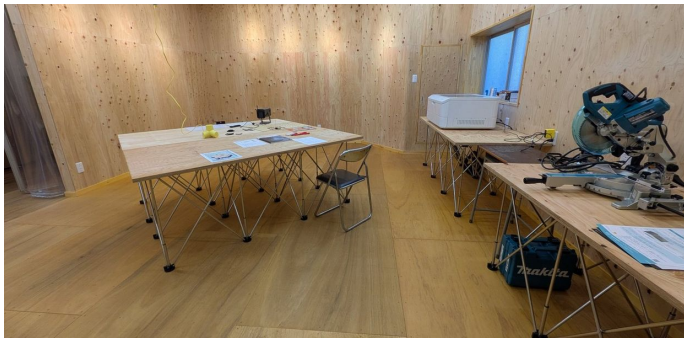
ここでいうメディアは、ものづくりやデザイン、作品だけでなく、つくること・考えることそのもの。
手を動かすうちに、思いがけない形が生まれ、自分の問いが変わっていくこともある。
子どもも学生も大人も、そんな気づきや変化を、それぞれの経験から探っていく場所です。

■Information

日時 2026年11月6日(金)14:30~16:30(一般公開)
会場 新見公立大学 3号館1階北奥
住所 〒718-8585 岡山県新見市西方1263-2
問合せ 発達支援メディアラボ(森) mori@niimi-u.ac.jp

オープンスタジオ(不定期)
日程はWebサイトとInstagramで
お知らせします
dsml-hub.jp @dsml_hub_2025





室内

■Outline

- ・「MONO / KOTO(モノコト)工作室」は、デジタルとアナログの両方からものづくりができる「ファブラボ(fabrication laboratory)」と、人が集まって話せるコミュニケーションスペース、作品を展示できるギャラリーを備えた拠点です。
- ・研究母体である発達支援メディアラボ(DSML)には、異なる専門分野の研究協力者が関わっています。その知識や経験を、学生や地域の人々との活動につなぎます。
- ・2027年度からは、副専攻の「造形文化ラボ」の活動拠点として利用します。

1 MONO / KOTO 工作室

THE WORKSHOP

新見公立大学3号館1階北奥に位置する工作室です。デジタル加工と手作業を組み合わせ、さまざまなものづくりに取り組めるファブラボを中心に整備しました。

例えば、紙粘土を手でこねた形を3Dスキャナーで読み取る。その3Dデータを、構築済みのAI制作支援プラットフォームを使ってレーザー加工用の2Dデータに変換し、木の板から切り出す。そして、切り出したものをもう一度手で組み立てる。手作業とデジタル加工を行き来しながら、頭の中にあったものを少しずつ形にしていきます。

つくっているうちに、最初に思っていたものとは違う形が

生まれることもあります。そこで初めて、自分が何をつくりたかったのかに気づくこともある。研究母体であるDSMLが大切にする「気づきと変化」は、こうした制作の過程にも見いだせます。

■MONO / KOTOの意味

「MONO / KOTO」は「もの」と「こと」です。手を動かしてものをつくること。そして、つくるあいだに生まれる体験や出会い、記憶に残る出来事。完成したものだけでなく、その過程で起こることも同じように大切にしたい。そんな考えから名付けました。

この考え方は、DSMLの名前にも重なっています。

■空間

室内は、木で統一しました。椅子には、廃校となった旧・井倉小学校の図画工作室で使われていたものを取り入れています。外壁は、周囲の傾斜地や山並みを意識し、グリーンとホワイトを斜めに塗り分けました。

室内には、デジタル工作機械を使うファブラボ、対話やワークショップのためのコミュニケーションスペース、作品を展示するギャラリー、パソコンで作業するデジタルアトリエがあります。主な機器は、レーザーカッター、3Dプリンター、3Dスキャナーです。

■スケジュール

- ・2026年10月30日 学生がアーティストの垣上凜乃さんとともに、ギャラリーの壁をペンキで塗るワークショップを行います。
- ・2026年11月6日 工作室をお披露目し、垣上さんのアート作品を特別展示します。
- ・2026年11月7日以降 オープンスタジオを不定期で開催します。展示作品はその開催日にご覧いただけます。日程はDSMLのWebサイトとInstagramでお知らせします。
- ・2027年度から 副専攻の「造形文化ラボ」の活動拠点として利用します。

■Process 例:手で生み出した粘土の形を、木につくり変えます。手作業(黒)とデジタル加工(緑)、両方の魅力を一度に体験できます。



紙粘土で造形する



3Dスキャナーで読み取る



AIでレーザー加工用の2Dデータに変換する



レーザーカッターで木の板から切り出す



もう一度、手で組み立てる

2 発達支援メディアラボ(DSML)

DEVELOPMENTAL SUPPORT MEDIA LAB

■名前の読み方

「発達支援」の「メディアラボ」ではなく、「発達支援メディア」のための「ラボ」です。

発達支援＝人の気づきと変化
メディア＝つくるものと、
つくること

ラボ＝試行と対話の空間

この名前には二つの意味を重ねています。一つは、人の発達を支える道具や作品、デザインなどを生み出すこと。もう一つは、つくることや考えること、その行為自体が本人の気づきや変化につながるということです。

■発達には誰にでも

ここでいう発達は、子どもだけのものではありません。学生にも大人にも、それぞれの経験の中で起こりうるものとして捉えています。

「問いを育てる、
感覚と思考のあそび場。」

見て、触れて、手を動かす。
そこから生まれる気づきや
問いが、少しずつ「自分自身
を創る」ことにつながってい
くラボです。

素材にふれ、身体を動かし、感じたことや考えたことを言葉や形にしていける。その過程では、ほかの人との対話も大切にしています。

ここでのアートは、あらかじめ答えを与えるものではありません。これまで気づけなかった問いに見える形にしたり、別の見方や関係を生み出したりすることがあります。ケア・アート・地域という異なる領域を行き来しながら、実践と研究を重ねていきます。

■大切にしていること

- ・ 専門分野の枠にとらわれず、異なる知識や経験が交わる実践の場であること。

- ・ 学生、専門職、地域住民、アーティストが、それぞれの立場から関わり、対話や制作を通して学べること。
- ・ 教育・福祉・アートの知見をつなぎ直し、新しい実践や表現が生まれる可能性を探ること。

■研究協力

勝野眞言(彫刻家／崇城大学名誉教授)、瀬上友里恵(詩人・ライター・校正者)、大館裕右(地域活性・文化振興事業／ポラスデザインラボ代表理事)、西山創(イス軸法®開発者・身体感覚調律師)、つん(美術家)、垣上凜乃(アーティスト)、多田隈祐司(デジタルクリエイター／ZERO INNOVATION代表)
研究代表 森英顕(彫刻家／健康保育学科 教授)

専門の異なる人たちの経験や考え方にふれることで、これまで見えていなかったものが見えてくることがあります。DSMLでは、そうした経験を、自分の認知領域を広げるきっかけとして大切にしています。ラボの立ち上げにあたっては、彫刻家の故・岡本直行氏(新見公立大学名誉教授)に研究顧問として助言をいただきました。



外観

■主な活動

- ・ 木のおもちゃプロジェクト
木材を使った知育玩具の開発。手作業とデジタル工作機械を組み合わせ、学生と地域の人々が制作に取り組みます。
- ・ イス軸法®と身体感覚の探究
開発者の西山創氏と連携し、姿勢や身体感覚、認知の関係を体験を通して探ります。
- ・ アーティストとの連携
制作・展示・対話を通して、さまざまな表現や考え方にふれる機会をつくります。
- ・ 新見美術館との連携
新見美術館と協力し、展示やワークショップなどを実施します。

3 副専攻と造形文化ラボ(ゾウラボ) MINOR PROGRAM / SCULPTURAL CULTURE LAB

■副専攻「地域共創実践プログラム(NiU-CCP)」

2027年度から始まる副専攻プログラムです。保育・看護・福祉の専門職を目指す学生が、新見のまちをフィールドに、専門分野を越えた実践に取り組みます。

「専門職になる。同時に、まちを動かす人になる。」

1年次後期に選考を行い、2～4年次に五つのラボのいずれかで活動する計画です。

- ・ こども発達・地域共創ラボ
- ・ にいみ移動支援ラボ
- ・ 造形文化ラボ
- ・ 地域・都市デザインラボ
- ・ 地域食支援ラボ

修了すると、「地域共創プランナー(ラボごとの名称)」の称号が授与されます。

■造形文化ラボ

彫刻家の森英顕と、新見市在住のアーティスト、垣上凜乃さんの2人で担当します。2人とも彫刻を学び、そこからアートのさまざま

な領域へと活動を広げてきました。

「造形文化」という言葉には、ものだけでなく、考え方や自分自身のあり方も形にしていける、という意味を込めています。人は、決められた枠の中だけで生きるわけではありません。これまでの考え方を見直したり、別の可能性を見つけたりしながら、自分自身を変えていくこともできます。その感覚を、実際に手を動かしながら探っていきます。

制作では、アナログとデジタルの両方を使います。手と機械を行き来することも、考えるための方法の一つです。

何をつくるかは、学生自身が考え、提案します。教員はあらかじめ答えを渡すのではなく、学生が自分の考えを形にしていける過程に付き合います。何が正しいかを最初から決めるのではなく、学生自身の判断や問いを大切にするためです。

活動は、MONO / KOTO 工作室での制作やプロジェクトを中心に、新見美術館での実習、研究協力者などを招くゲストトーク、SNS・Web・冊子を使った発信などを組み合わせます。新見美術館では、毎年、公的な文化施設の活動や運営にふれる機会を設けます。

■なぜ、専門職を育てる大学でアートなのか

保育も看護も福祉も、人の変化に立ち会う仕事です。そして、その仕事を目指す学生自身もまた、変化していく一人の人間です。専門職として働くこともあれば、別の領域に進むこともあるでしょう。専門とは異なる経験や考え方を持っていれば、行き詰まったときにも、別の可能性を見いだせるかもしれません。

アートには、答えのない問いに向き合い、自分とは異なる背景を持つ人と関わりながら、考えたり形にしたりする実践があり

ます。その経験は、専門職としての仕事に限らず、一人の人間としてこれからを考えるときにも関わってくるものでしょう。

■地域にとって

学生にとって、新見は学びや制作の拠点の一つです。同時に、そこから外の世界にふれ、異なる知識や経験を持ち帰ることも大切にしています。

アートを通して新見を訪れる人が生まれ、地域の人が外へ出ていく。そうした行き来の中で、これまでになかった出会いや関係が生まれることもあるでしょう。活動の結果として、新見に通う人や、離れた場所から関わり続ける人が増えることも考えられます。

地域の中だけで完結せず、外との自由な往来を生み出していくことも、このラボが大切にしていることです。



Instagram
@dsml_hub_2025

Web
dsml-hub.jp





垣上凜乃 KAKIUE RINO

2026 **11.6** (Fri.) ~

一般公開 11.6(金)14:30~16:30

11.7以降は不定期で開場します。作品はオープスタジオの日にご覧いただけます。

■Profile

アーティスト。1994年生まれ、5歳から新見で育つ。広島市立大学芸術学部彫刻専攻卒業、同大学院造形芸術専攻博士前期課程修了。「八百万の神」をモチーフに、ものに宿る気配や存在をテーマに制作。現在は新見を拠点に、岡山県内を中心に活動し、小豆島(香川県)でも滞在制作やワークショップを行う。2026年、新見美術館で個展を開催。

Instagram @kakiue_rino_artworks

■Workshop

壁塗りワークショップ

10.30 (Fri.) 10:30~18:00

展示の前に、アーティストと学生が
ギャラリーの壁をペンキで塗ります。

対象 新見公立大学の学生

■Information

日時 2026年11月6日(金)14:30~16:30(一般公開)

会場 新見公立大学 3号館1階北奥

住所 〒718-8585 岡山県新見市西方1263-2

主催 新見公立大学

問合せ 発達支援メディアラボ(森) mori@niimi-u.ac.jp

オープスタジオ(不定期)

日程はWebサイトとInstagramで
お知らせします

dsml-hub.jp @dsml_hub_2025

